

**NCUP**  
第3回 日能研 文学コンクール  
入選作品発表

【奨励賞】

【創作文】 『虹の声』

金山 恭子さん（聖徳大学附属・中2）

作品に対する思い・感想

中一のとてきに書き上げて以来ずっとしまいこんでいた作品です。  
故に拙い部分も多くありますが、今回この様な形で皆様にお披露目できること、大変嬉しいです。

「本当は虹が欲しかった」のは主人公の隆司の姿であり私の姿であります。  
雨上がりにふと、思い出すような。皆様にとってこの話がそんな物語になっていれぱと思います。

小さい男の子——4歳ほどの男の子が、自宅の小さな庭で空を見上げている。空は雲一つなく、まさに冬と言えられるような澄んだ青色をしていた。男の子は芝生の上に膝を抱えて座り瞬き一つせずにいる。そんな息子の様子に、室内の母親がやっと気付いたようだ。部屋の掃除を中断し、庭へと出てきた。「どうしたの？ りゅうちゃん」

母親に呼ばれた男の子は振り返る。男の子は立川隆司といい、普段は「りゅうちゃん」と呼ばれている。少し茶色がかった髪と、その髪によく似た色の目が印象的な四歳の男の子である。普段の日曜日なら外に出て、幼稚園の友人たちと鬼ごっこなどをして遊ぶのだが、この日だけは違った。一人で庭に出て、ただ空を一心にみつめる。母親からしてみると、この隆司の様子

が酷く奇異に見えた。いつものやんち

やっぷりは、どこへいったのか。少し不安になっていた。

「ママ」

「僕ね、虹が見えるのを待ってるの」

「え？」

息子が言ったその言葉は、母親にとつては酷く衝撃的であつた。何を見せても大抵は「へえ」という一言のみで、何かに強く惹かれることなど隆司はまらずなかつたのだ。

「ママ、どうして虹っていつつも見れないの？」

息子の隣に母親は座り込み、理論を説明する。

「そうね：：大気中に浮遊した水滴に日光が――って、そんなことをいっても分からないわよね」

説明の意味が全く理解できず、だんだん眉根がよってきていた隆司はうん、と頷いた。まだ幼稚園児の息子がこれ

で説明を理解されても母親は困っただ  
ろう。  
「ああ、そうだわ。お日様が、小さな  
雨――、見えないくらい小さな、ね。  
その小さな雨にあたって、お日様の光  
が分かれちゃうの。そうするとね、虹  
が見えるの」  
それでもまだ良くは分かってないよ  
うであつたが、隆司は「ふうん」とい  
って視線をまた空に戻した。  
「じゃあ、雨が降らないと虹は見えな  
いの……？」  
微妙に目じりを潤ませ、隆司は言っ  
た。可愛い可愛い一人息子にそこまで  
言われて、「ええ、そうよ」と断言で  
きるような母親はまずいないだろう。  
隆司の母親も例外ではなく、隆司に虹  
を見せる術を考えた。  
「そうだ、ちよつと待っててね」  
母親は立ち上がると庭の隅の蛇口に

ホースをつないだ。隆司は何が起こるのか予測も出来ず、ワクワクしながら母親の元へやってきた。ペたん、と座ると母親を見詰める。その期待に応えるかのように頷くと、母親は蛇口を思い切り捻った。太陽を背にし、ホースを真っ直ぐ空へと向ける。するとそこには確かな七色の光、虹が出来ていた。

「わぁっ：：」

隆司は歓喜の声をあげ、ぱっと立ち上がり、小さな手を水に向かって伸ばした。母親は高い位置でホースを持っていたため隆司の手は水までとはとても届かなかった。母親はふふっと笑うとホースを隆司の手が届くぎりぎりのところくらいまで下げた。そしてまた再び隆司は水に向けて手を伸ばした。

「だめだぁ」

隆司はぼそつと言って右手を下ろした。

「何が、だめだった？」

母親は苦笑すると、蛇口を捻り、水を止めた。それまでそこに出来ていた虹は、一気になくなり、そこには水溜りだけが残った。

「触れないの……」

「触れ……ない？」

そう言いながら母親はその場に座り、隆司を抱きかかえた。母親の腕の中でうん、と小さく言う。隆司は、独り言の様にこう言った。

「ほんと、虹が欲しかったんだ」

それだけ言い終えると隆司は、ぱつと母親の腕からすり抜け、部屋へと戻っていった。何故、虹が欲しかったのか。その理由を母親は知らなかった。母親は浅くため息をつく。息子の後を追って部屋へと戻っていった。

「ほんと、虹が欲しかったんだ」

：：か  
ベッドからむくり、と起き上がった。  
隆司は頭をがしがしと掻きながら呟く。  
隆司は今朝、幼い頃の思い出の夢を見たのだ。時は流れ、あれから九年。幼かった隆司も十三歳となっていた。  
「なんでそんなこと、考えてたんだろ」  
答えは誰も持っていない。自分の中にしかきつと答えはない。けれど隆司は、幼い頃の夢の理由を思い出すことが出来なかった。  
「まあ、いいか」  
今、昔のことを思い出しては、間違いなく学校に遅刻をするであろう。今の時刻は午前七時五十分で、何時も隆司が起きるのは七時三十分。隆司は二十分も寝坊をしていた。両親は共働きで、兄弟もいないために何時も一人で起きて、何時も一人で学校へと向か

っている。そんな隆司を起こしてくれ  
る人など立川家には一人もない。全  
て自己責任なのだ。隆司は部屋の明か  
りをつけ、パジャマを素早く脱ぎハン  
ガーにきちんとかけられた制服を手  
取った。地元の公立中学校にしては珍  
しく隆司の学校の制服はブレザーで、  
学年ごとにネクタイの色を変えられて  
いたりする。隆司は真っ白いシャツの  
上から今年の中学一年生用の紺色のネ  
クタイを締め、同じような色のブレザ  
ーを羽織る。小声でよしっと言うと、  
ポールにかけられた学生鞆を手に取り、  
自室を飛び出す。短い廊下を渡ると階  
段を駆け下りた。朝ごはんも食べず、  
玄関に直行をした。革靴を履き、誰も  
いない家に向かって行ってきますとい  
うと、隆司は外に出た。鍵だけ忘れず  
にかけると隆司は走り出した。こ  
走りながら隆司は空を見上げた。こ

の日の空も、夢で見た日の空のように  
青く、澄み渡っていた。隆司は詩人で  
もないし写真家でもないが、こういう  
空を見るのが好きだった。  
学校までは歩けば大体十分、全速力  
で走れば五分で辿り着ける。  
学校の始業時間は八時十分で、それ  
までに教室に着くことが出来れば遅刻  
にはならない。家を出たのが八時過ぎ  
あたりで、学校内に入ってから教室ま  
でが頑張った二分。このままペースを  
落とさず走り続けることが出来れば、  
間に合う時間ではあった。家を出て直  
ぐ左に曲り直進すると小さな公園がT  
字路の角、右側に見える。普段なら公  
園の外側をぐるっと歩くのだが今日は  
時間がない。隆司は公園の中を斜めに  
突っ切っていった。すっかり冬になっ  
た街の木の殆どは葉を落としていたが、  
植木のなかの木瓜などは綺麗に花を咲

かかせている。そんな風景や自分の吐く息が白いのを見て、隆司は本格的な冬の訪れを悟った。公園を出てさらに真っ直ぐ道沿いに歩くと赤いポストのある場所まで来た。ポストの奥にはいつもシャッターが閉められているコンビニ——否、もとはコンビニと呼ばれるいたであろう建物がある。少し錆びてきている赤いポストを曲り、隆司はラストスパートをかけ、走る。ここまですれば学校までは直進するのみなのだ。隆司の目の前には白い四階建ての校舎が見えている。もう一息、と自分に言い聞かせ少し苦しくなってきた息を抑え黒い校門を隆司はくぐった。生徒玄関までの短い五段の階段を二段飛ばしで上がり、一年二組の下駄箱の前に立った。は——と、息を吐いて呼吸を整えると、クラスの左から二列目の一番下の白い上履きを引っ張り出した。少

し踵が潰れ気味のそれを足に引っ掛けると、無造作に革靴を突っ込んだ。始業時間まではあと四分。今まで遅刻、欠席をしたことがない隆司は自分のちよつとしたプライドを守るため、一階の端の教室へと急いだ。途中何人かの生徒に挨拶をされたがろくな返事もせず走り、やっとなどり着いた一年二組の教室の戸を勢いよくあけた。

「おはよう！」

叫ぶように言ってから隆司は息を整えた。ゼーはーと大げさな音がする。

「隆司、大丈夫か？」

隆司が一番仲のいい男子が笑いながら隆司によつてきた。

男子は久野広貴という名前で幼稚園の頃からの友人である。隆司とは違い真っ黒な髪と目をもつ少年で、良く言えば明るく、悪く言えばお調子者とい

った性格をしている。そのためにか  
くなんでも人に話したがる傾向がある。  
広貴とは当然隆司が虹に触れたいと  
いつていた頃から仲良くしているの  
彼ならば自分が虹に触れたがった理  
を覚えているかもしれない、と隆司は  
ふと思った。だがすぐにその考えを  
定した。当時一番信頼していたであ  
う母親にも話していなかったようなこ  
とだ。友人になどまず話していないだ  
ろうと考えたからだ。  
「あー、なんとか……」  
「どうしたんだ、今日。いつもはもっ  
と早いだろ？」  
「寝坊したんだよ、寝坊。……腹減っ  
た。俺今日朝メシ食ってないんだ」  
「お前が寝坊？珍しい。おい皆、今日  
隆司寝坊したんだってよ。しかも朝メ  
シ抜きだった」  
急に声を大きくした広貴が、普段は

しっかり者に見える幼馴染が寝坊した、  
ということをあつというまにクラス中  
に広めた。  
「ちよっ：：よせよ、恥ずかしい」  
ほんの微かに頬を赤らめた隆司が広  
貴の口を押さえようとしたが、もはや  
遅かった。クラスの男子の殆どがどっ  
と笑う。  
「ははっ、マジで？今日は雨降るんじ  
ゃないのか？」  
「うわー、俺置き傘してないんだけ  
ど」  
などと結構失礼なことを言って笑う。  
ここでしつこく講義をすればただみっ  
ともないだけであるため、もうここは  
諦めていっそ笑い話にしてやろうと隆  
司は思った。  
「うるさいな、俺だって全知全能の神  
様じゃないんだよ。寝坊くらいするっ  
て」

「まあな、隆司が神様になれるくらいなら、俺だってなれるっつーの」  
広貴がへらへらと笑いながら自分に親指を向ける。そんな幼馴染を隆司は「ばーか」と言いつつ小突いた。隆司はそこでやっつと、鞆さえも置いていないことを思い出し、自席に向かった。机の脇に鞆をかけて一息ついたその瞬間、ドアを開ける音がした。時計の針は八時十分ぴったりを指している。「始業時間です、席について」  
若い女の担任の声で、あちこちに散らばっていた生徒たちがだらだと自席へと戻る。こうして今日も大して変わらない一日が過ぎていくのかな、と隆司はぼんやり思った。

空腹を押さえ午前中の授業を乗り切った隆司は、昼食の時間になると直ぐにこういった。

「あー、腹減ったなあ。さすがに朝メシ抜きは辛かった」  
給食の列に並ぶ隆司の一つ後ろで広貴は「お疲れ様」と言いつつ笑った。  
「生真面目な隆司が寝坊か。悪い夢でも見たか？」  
「夢：：ああそうか、夢のせいってのもあるかな」  
目の前のパンを皿にとりつつ、隆司は話している。広貴は少し冷めたトマトスープを受け取り、次の言葉を紡いだ。  
「どんな夢見たんだ？」  
「まだガキの頃、あーい、今もガキだけど幼稚園児くらいの子の夢」  
「へーえ：：あの頃のお前って今よりもう少しこう、カタブツじゃなくて無邪気なところが多かったよな」  
「カタブツって何だよ」  
そう文句を言う隆司を気にも留めず

広貴は続けた。  
「砂の城を作ってはしやいだりとか、  
虹が欲しい―だとか」  
その言葉を聞いた隆司は一瞬耳を疑  
った。今朝の夢のなかの隆司の願いを  
広貴は覚えていた。  
「今、今なんて言った？」  
「あ？お前この俺の話聞いてなかつ  
たのか？：：全く、しようがねえなあ。  
幼稚園児の頃、お前は俺に虹が欲しい  
っていったことがあるんだよ。自分で  
も覚えてないのか？」  
広貴の問いかけに隆司は無言で頷き、  
詳しい話を聞かせるよう目で訴える。  
その目に呆れたかのように広貴はため  
息をつく。と、こう言った。  
「席でな。ほら、お前もリンゴ取り忘  
れるぞ。今日はやけにぼっとしてる  
し」  
列の最前に置いてあるリンゴをお盆

に載せ、二人は自席へと帰っていった。  
二人は何時も机を向かい合わせにして  
食べている。他の友達が加わることも  
あるが、まず二人で固まって給食の時  
間は過ごしている。  
「昔：：橋本先生が担任だった時だか  
ら、年中か。雨が降っていて、先生と  
今日は外で遊べないな、って話してた  
んだ。けどそのあと、午後になってか  
らぱーっと晴れてな、今のお前の予想  
通り虹が出たんだよ」  
話の所々で頷きながら隆司は記憶を  
掘り返していた。だがまだ話の続きが  
見えず、広貴の話を待つことにした。  
『雨の日は外に出ちゃいけないけど、  
今日は特別』って言って、橋本先生が  
おれたちタンポポ組をつれて園庭に出  
してくれたんだ。で、虹を指差した先  
生が、俺たちに虹の御伽話を話して聴  
かせた」



ここまで聞くと、隆司は話を全て思  
い出していた。その虹の話が今まで聞  
いたどの御伽話よりも好きになった隆  
司は『雨の神様』の気持ちを、『雨の  
神様』の声を聴いてみたくなったのだ。  
そこで、手っ取り早く聴くためにはま  
ず虹が欲しくなったのだ。  
「思い出した……。雨の神様の声が聴  
いてみたい、か。サンキュー、広貴」  
「今聴くとなんだかアホくさいけどな。  
で、お前どんな夢見たんだよ」  
早々と食パン、スープ、ハンバーグ  
を食べ終えた広貴はリングゴに手を伸ば  
しながら言った。ここまで広貴に話さ  
せておいて、広貴に経緯を話さないとい  
うわけにはさすがにいかない。隆司  
は今朝の夢の話全て広貴に聞かせた。  
「成程、それで虹が欲しかった理由を  
ずっと考えてたんだな。まあでも、こ  
れで思い出せたろ？」

「ああ。よし、スッキリしたー。俺、  
思い出せないことがあるの許せない性  
質なんだよな。でもお前、よくそんな  
昔の事覚えてたよな。一字一句間違わ  
ず暗唱」  
ぐっと牛乳を飲むと隆司は口元を拭  
った。  
「なんだかんだ言ってる、俺もこの御伽  
話は割と好きだったから」  
すっかり食べ終わった広貴はにやっ  
と笑った。広貴自身もこの話を思い出  
すのは久しぶりだったようだなとな  
く嬉しそうにしていた。そんな広貴を  
眺めつつ、隆司も八分の一ほどにカツ  
トされたリングゴを食べた。  
退屈な二時間続きの家庭科の時間は  
ゆっくりと過ぎ、放課時間がやってき  
た。  
「じゃあな、隆司。俺はこれから部活

だから」

バスケット部で背の高さを生かしセ

ンターを務める広貴は帰宅する隆司に

手を振った。

「ああ。んじゃ、また明日――」

「おう」

ゆつくりと教室を出て今朝は走った

廊下を今は歩いていく。今朝のあわた

だしさを思い出すと、隆司は思わず苦

笑した。明日は間違いなく、いつも通

りの時間におきようと心に決め、家へ

と帰っていった。

「雨の神様の声が聞きたい……」

誰もいない自室のベッドの上で隆司

は呟いた。久しぶりに話を聞いたらな

んだか懐かしくなってきた。虹の仕組

みを知ってしまった今でも、あの先生

の話は輝いて聴こえる。神の声など聴

こえやしないことは分かっていたても、

手に入れられないことは分かっていた。も、今隆司はすごく虹を見たかった。「よし」半そでのTシャツに半ズボンという季節に合わない格好で隆司は庭に出た。夢を再現するかのよう。芝生の上に座り、空を見上げる。太陽の神様——お日様は今日も元気であることを再度確認し、隆司はホースを蛇口に繋いだ。太陽を背に、蛇口を捻り空へとホースを向けた。流れ出る水はそこに昔と同じように虹を見せてくれた。そしてまた右手を伸ばし、つかめるはずのない虹に触れようとした。触れるはずがないのは分かってはいたし、それを承知で手を伸ばしたのだがそれでもなんとなく寂しい気分。隆司はなった。「虹に……触りたいんですか？」き、思わず隆司はホースを落としてし

「ええ、あ……はい」  
「え、あの声の主は隆司と同じ年かそれ以下く  
らいの少女で、白い袖がちょうどうちの  
ように膨らんだワンピースに同じ色の  
リボンで良く手入れのされてい  
ると思われ、栗色の髪をゆるく縛  
っている。お兄さん、私がどうか  
は知らないけど、私は雨の神様を  
信じているから、触り方を考  
えました」  
「雨の神様の話を知ってる？あ、あの  
……触り方、教えてくれない？」  
「いいですよ。でも条件があります。太  
私は今、この空に触りたいんです。太

陽も、雲も、虹もある子の空に。だから空の触り方を教えてください。明日また、この時間にここに来ますから」  
それだけ淡々と言ったのけると少女はふわっとスカートを翻し、T字路のほうへと歩いて行ってしまった。何がなんだかわからなく不気味と思わなくもなかったが、隆司は雨の神の声を聴く手段が知りたかったため殆ど気にとめなかった。ただ、おかげで運動靴が水浸しになってしまったことだけは、ほんの少し後悔した。

その日一日隆司は、勉強をしている時も夕食を食べる時も風呂に入る時も、ずっと空の触れ方を考えていた。おかげでほかの事に殆ど気を回せず、うっかりスパゲッティに麦茶を注ぎそうにまでなった。これにはさすがの両親にも怪しまれ、

「どうしたの？具合でも悪い？」  
等と聴かれたが、隆司は曖昧に  
「ちよつと考え事」  
とだけ答えた。そこまでしてずっと  
考えていたのだがこれだ、という名案  
も思いつかず就寝時間になった。明日  
は寝過ぎすまい、といつもより目覚ま  
し時計を枕元近くに置いて、隆司は布  
団に潜り込んだ。空の触り方を一生懸  
命に考えようとしたが、疲れがたまっ  
ていたのか、すぐに眠りへについてし  
まった。

翌朝はいつも通りの時間に目覚める  
ことが出来た。派手に音のなる目覚ま  
し時計のため、毎朝うるさいな、と思  
いながら電源を落とす。隆司は昨日は  
顔も洗えなかつたつけ、と思いながら  
階段を降り、洗面所へと直行をした。  
水で軽く顔を洗い、完全に眠気を吹き

飛ばして誰もいない台所へ向かった。  
お手軽に食パンを焼くと、のんびり  
と一枚を食べ終えた。隆司は階段をあ  
がり、自室で着替えを済ませ、昨日と  
時間意外は何も変わらずに家を出た。  
「なあっ……広貴、頼みがあるんだけ  
ど」  
教室に着くなり、隆司は自席の右前  
の広貴に話しかけた。  
「あ？お前、昨日からおかしいぞ？ま  
あ、いいけど。なんだ？」  
「空の触り方、一緒に考えてくれね  
え？」  
昔から広貴と隆司の間にはまず隠し事  
はないし、相談事は真っ先にすると約  
束をしたことがある。最も、広貴に話  
していかないことも少しはあるが。  
「……今度ハンバーガーをLサイズの

ポテト付きでござってくれるなら」  
意地の悪い笑みを浮かべ広貴が言う。  
「お前がめついで。仕方ねえ、百円の  
ハンバーガーまでならおごるから」  
「ハイハイ、ありがとさん。で、今度  
はどうしたんだよ？理由から説明しろ  
よ」  
「ああ、悪かった」  
理由もいわずに『空に触りたい』な  
どといきなり言われては広貴も訳が分  
からなかったであろう。隆司は昨日家  
に帰ってからの出来事を一つ一つ広貴  
に話した。  
「へえ：：面白い話だな。なあなあ、  
今日は俺も部活ないからさ、お前ん家  
遊びに行つていい？その女の子見てみ  
てえ」  
「別に構わねえよ」  
とりあえず期限は昼食時まで、とい  
うことで隆司と広貴は空に触れる手段



つと広貴は言った。

「本当か？」

「嘘つくかってーの。俺は、空ってのはあの大きいのだけじゃないと思うんだ」

広貴は、写真の空を用意して、それに触れさせるのはどうか、と言った。隆司は驚いて

「それ、空って言うのか？」

と言ったが広貴は自説を曲げずに力説した。

「空の形は一つじゃないし、いつつも同じ空ってのはありえない。だからこそ、変わらない空に触るのがいいんだよ。不安定じゃなく、確かな空」

「へえ：：お前、案外そういうセンスあるのな」

「案外は余計だぞ」

「ハイハイ」

口先ではこんなことばかり言ってい

たがこれでも隆司は広貴に対して感謝  
をしていた。広貴がいなければ虹のこ  
とを思い出すこともなかったし、また  
空の触れ方を知ることにも出来なかった。  
広貴が幼馴染で良かった、今日の給  
食の麻婆豆腐を食べながら思った。  
長いようで短い授業をこの日もこな  
し、放課後を二人は迎えた。この日の  
空は昨日ほどの晴天とはいかず、雲が  
途切れ途切れに浮いていた。放課後二  
人は急いで隆司の家に直行し、隆司の  
私物のデジカメで空の写真を撮った。  
パソコンにデータを取り込み、印刷を  
する。オタクだとかそういう訳ではな  
いが、父親の影響で機械の類に隆司は  
強かった。プリンターから印刷された  
紙を取ると二人は庭に出た。本当に昨  
日と同じようにあの少女がやってくる  
か確証はなかったが、待ってみる価値

は十分にあった。そしてただひたすら  
待っているだけ、というのも暇なので  
昨日と同じくホースでまた虹を隆司は  
作った。そうして十分近い時を庭で過  
ごすうちにあの少女がまた現れた。  
「こんにちは：：」  
昨日と変わらない服装で少女は現れ  
た。家の門をあけてやると、少女は庭  
へと入ってきた。  
「こんにちは。あ、こっちは俺の友達  
だから」  
「はい。よろしくお願いします」  
少女はぺこり、と頭を下げて笑った。  
広貴も軽く礼をして挨拶する。  
「えーと、じゃあまず空の触り方を教  
えるよ。広貴」  
「お、俺が説明するのか？：：全く。  
あのな」  
そう言って広貴は、昼間隆司にした  
のと全く同じ話を少女に聴かせた。目

を輝かせ、時折頷きながら少女は話に集中していた。

「そっかあ……！お兄さんたち、ありがとうございます」

口調のせいか、大人びて見える少女なのだがこの時ばかりは年相応の反応をしてみせた。広貴は照れたのか、ただ「どういたしまして」とだけ言った。

「じゃあ、虹の触り方をお教えしますね」

そう言いながら少女は、ポケットから透明なガラスの小瓶を取り出した。中には水が入っている。少女はそれを隆司に渡した。

「これは？」

「お兄さん、雨は光がないと虹にならないけど、雨も虹だと私は思っています。雨が降らなきゃ虹は出来ないし、お日様がなければ虹はできない。それに入ってるのは、普通の雨水なんですけど、

それも光さえあれば虹になりました。  
それは虹の欠片です」  
話を聴きながら隆司も広貴もなるほど、  
と思った。確かに水は雨の一部分であ  
る。これを空にかざせばそこに虹を見  
ることも出来るだろう。そう考えれば  
それは確かに虹の欠片であつた。  
「成程：：ありがとう」  
「ええ、私も嬉しかったです。：：お  
兄さんたち」  
「ん？」  
「光をくれて、有難うございます。や  
つと温かくなりました。今私、すごく  
嬉しいですよ。本当に、有難うございま  
した」  
次の瞬間、二人は目を見張つた。目  
の前でついさっきまで喋り、動いてい  
た少女が突然輝き、その場から消えて  
しまったのだ。そして最後に残した言  
葉は間違いなく、隆司が幼い頃からず

つと聴きたかった声である。

「雨の：：神様？」

二人の声は丁度重なった。夢かとも  
思いお互いに頬を抓りあったりもした  
がそれらは全て無意味であった。なぜ  
なら、確かに印刷をして渡した空の写  
真はなくなっていたし、隆司の手には  
透明な小瓶がそのまま握られていたか  
らだ。

「まあ、いっか。良かったな隆司、夢  
が叶って」

「：：ああ、有難う。俺も感謝してる  
ぜ、広貴！」

「どういたしまして」

二人はあははっ、と大きな声を出し  
て笑った。一頻り笑うと広貴は家に帰  
ることにした。隆司は広貴を公園のと  
ころまで送っていき、一人でまた誰も  
いない家へと帰った。

「ただいまー、って親もいないのに馬

鹿  
み  
た  
い  
だ  
な  
。  
あ  
、  
∴  
∴  
そ  
う  
か  
。  
一  
人

温  
か  
い  
。  
雨  
の  
神  
様  
の  
欠  
片  
。  
小  
さ  
な  
ガ  
ラ  
ス  
瓶  
は  
、  
お  
日  
様  
の  
よ  
う  
に  
純  
粋  
な  
少  
年  
の  
手  
に  
は